中部有力メーカー
トップインタビュー

大胆に新たな取組みへスタート元年

サラダコスモ ギアリンクス

代表取締役社長
中田　智洋氏

日本の食糧確保と南米日本人農家支援目指す

ギアリンクス設立10年

—ギアリンクスが設立10年を迎えましたが。

中田　本業のサラダコスモは、プライベート野菜の生産会社で、いわば食糧分野で、岐阜県や日本の食糧確保の支援を目的にギアリンクスを旗揚げしました。活動は公共性の高い事業ですが、民間企業なので収支は合わせなければいけない。そんな思いで10年続けてきて、4億7・8人の方から9999万円の出資金を集め、03年にアルゼンチンにJ250haの農場を取得し、その農場の有機認証を得て、その畑で生産された大豆を日本に輸出するまでになりました。

ピスコ生産者のグスクマファミリーを訪問した中田智洋社長（中央）。右は在ペルー岐阜県人会前会長・小島良弘さん

移民1世の南米に渡った夢、故郷に錦を飾るという夢を実現させるお手伝いができればと思います。

ペルーのブドウ焼酎「ピスコ」生産者のグスクマ氏（城問）さんは、ピスコのお披露目会の席上で、「私は両親の苦労を見て育った。両親は日本への帰国を夢見ていたがかなわなかった。しかし、ピスコが私たちを日本に帰らせてくれ、両親の夢をかなえてくれた」と思いをさらされました。

その言葉に私も涙の皆さんもグッときました。1人でも多くの方にスポットライトが当たって、その方が感謝いただければと思います。

規模の拡大といっても大小規模でもNPOの活動を地道に続け、さらにこの事業が今後の食糧確保事業のバイブルとまでは言いかなくても、先駆的な事例として取り上げてもらえるように続けていきたいです。

—商品アイテムは。

中田　現時点では、大豆、ニンニク、マカダミアナッツ、ピスコの4種類です。過去にはトウモロコシも扱いましたが、価格の折り合いがつきませんでした。

今、新しく考えているのはアルゼンチンのワインです。南米のアンデス山脈の麓に移民された山形県出身の農家がみえます。その農家は、アルゼンチンでのワインづくりを夢見ていたのですが、入植して50年が経ちますが、庶売にブドウ畑はできたけれどもワイン造りにまでは、いっていません。ワイン造りは、移民1世の夢です。この夢のお手伝いとしてワイン造りと日本に広めず仕事を1年半には、スタートさせたいと思います。

—小売業の方々の理解は。

中田　ギアリンクス10周年式典では東海コープさんに、移民2世の南米日本人農家の支援がこの10年間でようやく動き始めたというのが私の実感です。

—出資者の方々も食品業界だけでなく、さまざまな方がみえます。

中田　岐阜県の方が70%、他府県が30%、さらに男女別では30%が主婦の方です。10年前にはまだ食糧危機という意識は薄かったですが、一般の方々が食糧問題について深く意識されていたということは意義深いことだと思います。

—10年4月には国連会議の席上でギアリンクスの活動を発表されました。

中田　08年の世界的トウモロコシを燃料として栽培するという国際状況の中で、日本の食糧確保として、農家による海外食糧調達計画を考えました。その中で、ギアリンクスの存在が農水省にも認知され、国連会議に日本の事例として推薦されたのです。国連会議では、1900人の国の参加者の前で、事業のスピード、規模には満足はしていませんが、小規模ながら事業目的の日本の食糧確保と南米日本人移民農家の支援がこの10年間、ギアリンクス10周年、ギアリンクス10周年と節目の年だった。両社の代表を務める中田智洋社長にこれまでの歩みを振り返っていただき、さらに次の展望を聞いた。

10年はサラダコスモ30周年、ギアリンクス10周年と節目の年だった。両社の代表を務める中田智洋社長にこれまでの歩みを振り返っていただき、さらに次の展望を聞いた。

この発表を通じて私と弊社の社員は、サラダコスモの事業は「食糧問題解決の一つの答えなんだ」という思いを強く感じました。モヤシは小スペースで低コストで農薬、化学肥料を用いずに、しかも季節に関係なく大量に生産できるものです。世界の食糧問題が日常的に悪化している地域には、長期間を要する農場、灌漑施設の整備ではなく、国連として野菜工場を建設すれば食糧問題の一つの解決策になると思います。サラダコスモはスプウハウが必要な産業のノウハウがあるので、それを提供する用意があることを伝えました。

—10年のうち8年赤字といわれますが、黒字化になってきたという解釈でよいのでしょうか。

中田　黒字になったのは10年と8年です。赤字といっても最初の4年は売るものがなかったわけですから実質6年です。近年では経営内容も規模の拡大もようやく上昇の軌道に就いたというと思います。

—ちこり村は、ギアリンクス、サラダコスモの活動を紹介する上で、重要な施設だと思います。

中田　ちこり村は、オープンして丸4年が経ちます。ちこり村は、高齢者の雇用、遊休地の活用、日本の食料自給率の向上、地域産にしたいと思います。

—ちこり村の人気の理由は。

中田　民間企業が運営している町の公民館としてのカルチャー性が高く評価されたのだと思います。

—国産ちこりの生産は。

中田　ちこりの販売は、もともと販売ルートがありますので心配はないのですが、原料のちこり芋の栽培に苦労しています。4年経ちますが、毎年、猛暑、長雨、低温などいろいろな問題に苦しめられています。また、原料のちこり芋は輸入に頼らざるを得ない状況です。できるだけ早く100%国産にしたいと思います。

—ちこり村の拡張